

漢詩を學ぶの記

早川 蓉堂ようたう

富士山の美、東海に冠たれば、文人墨客、古來行遊するもの多く、吟詠の佳作、鮮なからず。予、山麓に生まれ、幼きころより好みて古書を讀み、多く漢詩文の富嶽を詠ずる者を見、寫してこれを誦す。又た外王母、詩を吟じて自ら楽しみ、側らに侍してこれを聞く。長じて後、《離騷經》《九歌》および唐賢の詩を讀み、深くその風を愛し、戲に漢字を聯ね、騷體および五七言を作り、讀書の師、簣を易へれば《招魂》を賦すも、猶ほ未だ格に入らず、押韻もまたこれ無し。

家大人、時に偶ま東京の聖廟を過ぎり、一師の名を石川岳堂といふありて、専ら詩法を授くるあるを知る。予が志を憐みてこれを告ぐ。予喜ぶこと甚しく、數日の後、大人と共に聖廟の東廂の下に赴き、岳堂先生に謁し、師弟の禮を執る。時に年十五なり。先生の名は忠久、岳堂とはその號なり、聖廟の祭酒にして、東京大學文學博士、専ら六朝文學を脩め、善く漢詩を作り、覆瀾の舉に意あり。

皇朝詞章の學、寧樂の代に始まり、平安京に行はれ、五山に隆んに、徳川氏執政の世に盛んなり。舊邦維新、清國および三韓の使節來朝し、唱酬、日に行はれ、文を以て友を會す。後に甲午の戰役に値ひ、國粹の説、甚だ熾んに、天、斯文を喪ひ、遂に衰落して今日に至る。然るに風雅の餘流、脈脈として絶えず。岳堂の詩派、もと咸宜園の廣瀨淡窓の門に出づ。俞曲園の稱するところの旭窗は乃ちその弟なり。咸宜園十八傑に竹添筍園あり、詩法をその子たる從三品文學博士竹添光鴻に授け、光鴻はこれを平野紫陽に傳へ、紫陽はこれを岳堂に傳へ、今に二百年なり。

先生教へて曰く「唐賢の七絶二百首、『唐詩選』の選ぶところの者、先づこれを誦じよ。多く七絶を作り、これを作らば則ち攜へ來たれ」と。先生の詩法を講ずるや、毎月預め題を示し、學生をしてこれを詠ぜしむ。予始めて詩を作るに、題に云く「月夜啼鵑」と。その辭に曰く、

空山孤月夜猶深

空山の孤月、夜なほ深し、

啼血帝魂翔北林

血に啼いて帝魂、北林に翔る。

客舍蕭條人未寐

客舍蕭條として人いまだ寐ねず、

離鄉萬里寂寥心

離鄉萬里、寂寥の心。

先生曰く「可なり」後、一年の間、作るところ二百首なるも、先生の可といふ者、僅に二三首のみ。予の性、甚だ拙く、愚魯遲鈍にして、心法に暗く、惟だ刻苦勉勵し、吟稿を推敲し、彈指して切齒し、空壁を凝視し、夜を徹するも成らず、自嘲して泣かんと欲す。然るに一年を過ぎ、作るところの詩、三分の一、皆なこれを可とす。又た一年すれば、三分の二なり。七絶の法すでに成り、更に五律を學び、三年にして成る。七律を學び、三四年を経て略ぼ成る。時に李義山の體に効ひて、詩を題して曰く、

心醉幽香淡未知

心は幽香に酔ふも淡くして

未だ知らず、

沉吟纖月透簾時

沉吟す、纖月の簾を透かすの時。

花搖虛壁疑留影

花は虚壁に揺れ、疑ふらく

は影を留むるか、

煙斷青山恍憶眉

煙は青山を斷ちて恍として眉

眉を憶ふ。

一點流星惑孤夢

一點の流星は孤夢を惑はせ、

六街細雨鎖相思

六街の細雨は相思を鎖す。

低徊曲巷翠衫冷

曲巷を低徊すれば翠衫冷やかに、

春晚斜風掠面吹

春晚の斜風、面を掠めて吹く。

先生曰く「汝の詩學、進む所あるかな」と。遂に號を賜ふて曰く「荅堂」と。又た別に賜ふて曰く「岱梁」と。富士山の別稱は「芙蓉峰」といへば、皆な富嶽に因りてこれを選ぶは、その本を忘れざるの意なり。

予、後に華洛の太學に遊び、宋代文學を専攻し、黃山谷の詩を論ず。又た西のかた華國に赴きて、身を北京大學に厠き、廣く諸賢の青襟と交はるに、恰も文運、日に隆盛に赴くの期に逢へば、遊宴の際、必ず詩を賦して樂しみとなす。甲午の秋に、羊城の康樂園に遊びしに、知を郭雲翼に得たり。郭鵬飛、字は雲翼、沈邱の人、博士研究生なり。予、これと交はること最も深く、琴を弾じて茶を飲み、また珠海、光孝寺、六榕寺等に往き、扇を揺るがせて佳句を吟ず。後、燕都に歸るもまた、屢ば時を擇びて相ひ見ゆ。雲翼、丙申の秋より、東海洛陽の太學に居ること一年なり。その本國に還るに及ばんとし、作る所の詩文を編みて「騎鯨集」と名づけ、予をして序を作らしむ。その文に曰く、

「郭雲翼騎鯨集序」

我東海詞章之學、今且亡矣。沈邱郭雲翼、遠遊萬里、居華洛一載、目睹其寢頓之狀。凡專門之士、僅可讀詩文而解意、而能自作者、寥寥可數耳、式微之嘆、幾不能免。謂予曰…東土雖信美、而無人可以唱和、心實不樂也。予為之深恥焉。明治盛世、舊邦中興、洛陽太學、輩出聰穎博雅之材、獨步一世、天下皆翕然仰之。內藤炳卿、狩野君山、鈴木豹軒、青木君雅、吉川善之、下帷多年、皆善作詩文者也。時值清室土崩、羅叔蘊、王忠愍、亡命而臻、卜居於辟雍之畔、及時設宴、席上分韻、浮大白而盡歡、學林佳話、至今尙傳。雲翼之遊也、晚之已百年矣。其為人好學、可以論文於絳帳也。嗜奇書、可以入於太學石室而觀之也。善飲、可以酌伏陽旨酒而盡之也。好聽琴、可以訪無家先生於脩竹之下也。然唱和之樂、猶緣木而求魚、無若之何。我京洛、世號平安京、四靈相應、千載古都。北野聖廟、梅林逢春、金蕊吐芳、乃管丞相驅馬之地也。遠望東山三十六峰、細雨霏霏、青黛增潤。近俯鴨江秋水、夜泛銀河之波、是賴子成書窗也。永觀堂錦葉映乎落日、霜風蕭颯、是王靜安舊遊覓句處也。山色水光皆存之、而風雅不作、已久矣。予生乎季世、少習詞章、承咸宜園之流、尙雅厚而不譎、吟哦自樂、而未曾見比肩而同進者焉。後遊華國、結交於郭雲翼等數百士、寄情懷於五七言中、興寄無涯、默而識之、其樂不可言耳。雲翼此遊、吟稿日積、遂編文集、

厚冊已成。嗟夫、可惜也哉、語妙意深、氣格高遠、可追黃公度、亦今之國人、解者罕見焉、矧和之者乎。予明歲還國、所當務者、殆在於此。天心先生曾論曰…亞洲、一也。教育英才、麗澤講習、振興詩學、不啻使風雅之道無虧於異代、而二邦詩心、同歸一處、修好永年。今告雲翼曰…十餘載後、重遊日東之時、斯學陵遲、必已改觀、遍招文士、開盛宴於洛下、半夜行吟、洛岸清風、東山明月、以暢詩人之懷。

——我が東海詞章の學、今まさに亡びんとせり。沈邱の郭雲翼、遠遊萬里、華洛に居ること一載、その寢頓の狀を目睹す。凡そ専門の士、僅に詩文讀みて意を解すべく、而して能く自ら作る者、寥寥として數ふべき耳のみ。式微の嘆、幾ど免るあたはず。予に謂ひて曰く…「東土、信に美なりと雖も、人として以て唱和すべき無く、心、實に樂まざるなり。予これがために深く恥づ。明治の盛世、舊邦中興し、洛陽の太學、聰穎博雅の材を輩出し、一世に獨歩し、天下みな翕然としてこれを仰ぐ。内藤炳卿、狩野君山、鈴木豹軒、青木君雅、吉川善之、帷を下すこと多年にして、皆な善く詩文を作る者なり。時に清室の土廟に値ひ、羅叔蘊、王忠愍、亡命して臻り、居を辟雍の畔に卜し、時に及んで宴を設け、席上に韻を分かち、大白を浮かべて歡を盡くし、學林の佳話、今に至るまで尙ほ傳ふ。雲翼の遊ぶや、これに晩ること已に百年なり。その人となり學を好めば、以て文を絳帳に論ずべきなり。奇書を嗜めば、以て太學の石室に入りてこれを觀るべきなり。善く飲めば、以て伏陽の旨酒を酌みてこれを盡くすべきなり。琴を聽くを好めば、以て無家先生を脩竹の下に訪ふべきなり。然るに唱和の樂、猶ほ木に緣りて魚を求むるがごとく、これを若何ともする無し。我が京洛、世に平安京と號し、四靈相ひ應じ、千載の古都なり。北野の聖廟、梅林、春に逢ひ、金蕊、芳を吐くは、乃ち菅丞相の馬を驅るの地なり。遠く東山三十六峰を望めば、細雨霏霏として、青黛、潤を増し、近く鴨江の秋水に俯けば、夜に銀河の波を泛ぶるは、是れ賴子成の書窗なり。永觀堂の錦葉、落日に映じ、霜風蕭颯たるは、是れ王靜安の舊遊して句を覓むるの處なり。山色水光、皆なこれを存し、而して風雅作らざること、已に久しいかな。予、季世に生まれ、少くして詞章を習ひ、咸宜園の流れを承け、雅厚を尙びて謫らず、吟哦して自ら樂むも、未だ曾て比肩して同に進む者を見ず。後に華國に遊び、交を郭雲翼等數百士と結び、情懷を五七言中に寄せ、興を無涯に寄せ、黙してこれを識り、その樂、言ふべからざるのみ。雲翼の此の遊、吟稿、日に積み、遂に文集を編し、厚冊、已に成る。ああ、惜しむべきかな、語妙にして意深く、氣格高遠にして、黃公度を追ふべきも、亦た今の國人、解する者、罕にこれを見る、矧やこれに和する者をや。予、明歲、國に還り、當に務むるべきところの者、殆ど此に在り。天心先生、曾て論じて曰く「亞洲は、一なり」と。英才を教育し、麗澤講習し、詩學を振興し、啻に風雅の道をして異代に虧くこと無からしむのみならず、二邦の詩心、同じく一處に歸し、好を永年に修めんことを。今、雲翼に告げて曰く「十餘載後、重ねて日東に遊ぶの時、斯學の陵遲、必ず已に觀を改め、遍ねく文士を招き、盛宴を洛下に開き、半夜に行吟し、洛岸の清風、東山の明月、以て詩人の懷を暢べん。

ああ、予が意、この文に盡きたり。更にまた言ふ所なし。

皇朝の漢學、重ねて柳營明治の盛んなるを見るは、己を脩めて人に及ぼし、奮勵努力して、ただ來日を俟たんのみ。

予昨年の秋、歸國し、聖廟に遊びて岳堂先生に謁す。先生、齡、八旬を過ぎ、老いて益す壯にして、莞爾として笑を含み、以て席を賜ひ、研學の法を戒めて曰く「汝、大成すべきなり。切に小成に甘んずること勿れ。學の本義たるや、文質彬彬として、大道を行くものなり。今の學者、功を爭ひて小徑を擇び、その視るところ愈よ細かにして、未だ嘗て物の大體を觀ず、己んぬるかな」と。又た詩學を説きて曰く「本朝風雅の道、才士多く、千載を経て彌よ章らかなり。一朝にして將に地に墜ちんとするは、誠に惜しむべきかな。今、我と汝と俱に在り、我輩の負ふところ甚だ重きなり。切に須くこれを念へ」と。